

特に目を引くように思われた。

第二部では、「ネオグリーンガリズム」（加藤）の立場から、精神疾患を急性期の一次性感情障害と慢性期の二次性精神衰弱とに二分するグリーンガーの単一精神病論が改めて検討される。この疾患横断的視点の重要性は、臨床経験の乏しい評者からも痛感される。なお、加藤は触れていないが、加藤が注目するヤスパース『精神病理学総論』第四版は、改訂に当たってヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼカーの医学的人間学を多く参照している点でも興味深い。

第三部は自閉症論である。とりわけ、自閉症についてテレンバハの「エンドン」や（ブランケンブルクを下敷きにした）アスペルガーの「自明性の喪失」「アンダースサイン」をもとに論じただりは、現象学的・人間学的精神病理学の立場からなされた自閉症論として出色であろう。評者の関心からすれば、これは「アンテ・フェストゥム以前」とでも言うべき領野であり、これに対して加藤が本書でしばしば言及する「うつ病－認知症移行領域」の方は、「ポスト・フェストゥム以後」と呼ぶことができよう。

第四部では、グローバル化が進む現代における病態の変遷が論じられる。中でも、父性の衰退・IT化・ノマド化が統合失調症に対して庇護的に働くという指摘や、現代の「職場結合性うつ病」は「自己自身の背後に残される」（テレンバハ）のではなく、「（会社や上司といった）他者の背後に残される」という「偽性メランコリー親和型」構造になっているという定式化は、極めて重要であるように思われた。

最後に私事にわたるが、加藤は評者を臨床の道に導いてくれた人物である。評者が加藤の知遇を得たのはまだ文学部にいた頃だが、加藤はある研究会で評者が精神医療に関心を持っていることを知るや、初対面の評者を自治医大に見学に誘ってくださり、評者はその勢いのまま医学の道へ転じた。加藤はその後も、学閥の違いなど悠々と飛び越えて、出不精な評者をパリへ連れ出してくださりもした。後学に対するこうした「無条件の歓待 (hospitalité)」（デリダ）が、そのまま病者に対する hospitalité につながっていることは、本書のそこかしこからも見て取れる。本書では主題化されていないけれども、この hospitalitéこそ、加藤の臨床哲学の最大の鍵語——加藤は実際にデリダの歓待について論じたこともある——ではあるまいか。

グローバル化時代の精神病理学

精神科臨床の基本視座

加藤 敏著

金剛出版, A5判 364頁, 3,740円, 2024年11月刊

（関西青少年サナトリウム）清水健信

斯界の第一人者が臨床歴50年の節目に刊行した論文集である。現象学からラカンへ転じた加藤は、「狂気内包性人間学」を掲げて独自の臨床哲学をさらに彫琢している。

第一部には、現代精神医学の現況について考察した論文が集められている。評者には、ICD-11で「正常」なパーソナリティが規定されたことや精神保健福祉法の任意入院制度について、フォーコーの生政治論の観点から批判した論考や、グローバル化社会自体がアスペルガー障害化しているという指摘などが

本書は、加藤の「歓待」の精神病理学・臨床哲学
を代表する大切な一冊と言えるだろう。
